

## 年間第4主日 A年

第一朗読 ゼファニヤ 2・3、3・12-13  
第二朗読 一コリント 1・26-31  
福音朗読 マタイ 5・1-12a

2026.2.1 9:30 ミサ  
カトリック高円寺教会  
主任司祭 高木健次神父

今日の福音で、イエス様がマタイの福音書で人々に語られる最初の言葉のところが出てきました。これはイエス様のこれからなそうとされる活動全体を表しているとも言うこともできるし、何のためにこの世にいらしたのか、また、わたしたちをどこへ導こうとされるのかという全体像の表現と言ってもいいと思うんです。

八つの「幸い」が出てきましたけども、その文学的な構成の中で、中心は真ん中にあると言うことができるんです。八つのうちの真ん中、4番目と5番目、「義に飢え渴く人々は幸いである。その人たちは満たされる」、「あわれみ深い人々は幸いである。その人たちはあわれみを受ける」。これが真ん中になってるわけですけども、それを中心の大黒柱として、全体が支えられていると言っていいんです。なんでかつて言えば、この中心の「正義」と「あわれみ」っていうテーマは、神様ご自身を表す——神様は正しい方、そしてあわれみ深い方っていうのが、聖書を通して何度も何度も出て来る——神様は正しくあられ、そしてあわれみ深いんだっていうのが、神様ご自身を表わす形容詞というか表現なんです。

「義に飢え渴く」っていうのは、周りの人が正しくあつたらいいのになあと思ってるっていう意味ではありません。飢え渴くっていうのは、わたしたちが飢え渴いているときに、周りの人がいくらご飯食べたって、飲み物飲んだって、わたしたちの飢え渴きは関係ないですね。自分の中に正義を求めてるっていう、自分自身が正しくあろうとするっていうのが、義に飢え渴く人々です。

もちろん、何が正しいかっていうのは、わたしたちは初めからすべて知っているわけではない。しかし、正しくあろうとすることを通して、神様ご自身が導いてくださるんだっていう希望です。だから、場合によっては、前は正しいと思っていたけど、

ほんとは違ったかもしれないと思ったら軌道修正する。そういうものも含めて、正義に飢え渴いているっていうのは、それをいつも追い求めている——自分として、です。と同時に、一方で、周りの人にはあわれみ深くある。自分として正しくあろうとし、周りの人にはあわれみ深くするというのが、イエス様がわたしたちを導こうとされる先だし、それは神様ご自身の似姿、神の子であるわたしたちの神様によって造られる到達点なんだと言うことができるわけです。

しかし、ともするとわたしたちは周りの人が正しくあることを求め、そして自分があわれみを受けるっていうことを求めてしまうっていう傾向を持っているわけです。特に昨今はいろんなところで正義の名のもとに他者を批判するということが横行しているわけで、それはまさに「幸いな道」ではないということになるわけです。

もちろん、いろいろな社会的なことに対して、「正していこう」あるいは「より良いものにしていこう」って声を挙げることは大事なんですけども、しかし、信仰の、あるいは宗教の、あるいは——全体として言えるか分からけれど——キリスト教の中心は、自分自身がどうあるのかということをいつも棚に置いといて周りを、っていうことはできないんだということだし、じゃあそれで社会は良いものになっていくのか。

イエス様のやり方は、周りの人に「こうしなさい。ああしなさい」ではなくて、イエス様ご自身がそこにいらっしゃることを通して良い影響を受け取る人が——あるいは部分的にでも——一人でもいれば、さらにそこから神の国が少しづつ広がっていくのだというのがイエス様の生き方なわけです。他の人に強制的に何かをさせる——こうしなさい——というよりは、イエス様がいらっしゃることを通して良い影響が広がっていく。それは、イエス様に従おうとするわたしたちがまさにそこを目指しているのならば、周りの人に少しづつその影響が広がるんだ、それは長い道のりでもどかしいように思えるけど、それ以外に神の国の広がり方はないのだということが、聖書に何度もこれから出て来るものなんではないかなと思うんです。

わたしたちも、振り返ってみれば、自分自身が正しくあろうとし、そして周りの人へ優しくしようとするっていう、いろんな人たちに会って少しづつでも影響を受けたのではないかなと思います。

わたしたちがではなぜそうできないのかっていえば、いろんな困難とか苦しみを通して、恨みとか怒りとか自分の抱えている問題に対する心配事で心が曇っているから、神様の道が見えなくなっちゃう。「心の清い人々は幸いである。その人たちは神を見る」と言いながらも、いろんな形で心が清くなくなっちゃうんです。それは、自分が悪い心とか意地悪な心が最初からあるわけじやない。

いろいろな困難の中で、困難を通して人は優しくなれると一般的には言うけれども、でも多くの場合はその逆のような気がします。「わたしが抱えている問題に比べたら、あなたのは大したことない」って思ってしまったり、言ってしまったり、やってしまったりっていうことの方が多いのではないかなと思います。だから、自分のいろいろな困難にもかかわらず、自分自身が正しくあろうとし、そして他の人に優しくあろうとするっていうことは、実はわたしたちが人間として行うことができる範囲を超えてる、そういう招きのような気がします。

だからこそ、絶えずイエス様に繋がり、イエス様から力をいただき続けなければ、イエス様から影響を受け続けなければ、歩むことができない道もあると思います。

わたしたちが何のために呼び集められるのか、一人ひとりがイエス様から影響を受け、そしてその影響を受けた分だけ他の人にその良い影響が伝わっていく。そういう繋がりの中に呼ばれたのだということを思い起こしながら、他の人を動かそうとするよりも、まずイエス様と出会い、そしてイエス様のように正しくそして優しくっていう、その人間のあり方を歩んでいくことができますように。そのためだったらいくらでも神からの助けはあるんだというところに希望を置きながら、何のために信仰生活に呼ばれたのかを絶えず思い起こしながら、イエスと共に歩むことができますように、呼び掛けと恵みに心を開きたいと思います。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC      <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>  
携帯    <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>